

## 2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	吉村 美路
最終学歴	学位	専門分野
立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科	修士	社会心理学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

時代に合わせた新たな技術、価値にアンテナを立て、常に知識のアップデートを行いながら教育活動に従事する。専門分野について深く洞察できる視点を養うとともに、多様な視点からも物事を考えることのできる知識とスキルの向上に努める。

##### 【目標】

自ら考え行動できる人材の育成に努める。ビジネスの現場において、必要な教養、振る舞い、考え方を習得し、自他を大切にしながら社会に貢献できる人物の育成に尽力する。コミュニケーションの知識、技術を身に付け、社会における適切かつ良好な信頼関係を構築できる能力の養成を目指す。自己の個性を十分に生かしつつ、他者を尊重できる人間の育成に努める。

##### 【方針】

理論をさまざまな社会活動の場で応用できる人間の育成に努める。目の前の課題に対し、どのような課題解決ができるのかを自ら考え行動できるよう、できるだけ多くのチャレンジの機会を作っていく。

##### 【計画（方法）】

環境の変化に適応し、状況に応じて臨機応変に対応する能力を習得することを目指す。創意工夫を凝らしながら、困難な状況に陥っても「何ができるか」を学生自らに考させ、実践させることで、変化の激しい社会で生きる能力を養う。

#### ○担当科目（前期・後期）

##### （前期）

ビジネス実務総論、基礎演習Ⅰ、上級コミュニケーション論、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、地域ビジネス特講Ⅰ

##### （後期）

異文化コミュニケーション、基礎演習Ⅱ、国際コミュニケーション論、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

#### ○教育方法の実践

学生が主体的に考えることができるよう、実践を交えたアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた。知識と現実の世界をリンクさせ、自律して思考できるよう努めた。学んだ知識を、学生自身が「社会でどのように生かすか」をイメージしながら学びを進められるよう、多くの事例を取り上げ、学生に意見を求めた。特にコミュニケーション関連の講義では、学生同士のワークや心理検査なども多く取り入れ、学生自ら手を動かしながら学ぶことを大切にされた。演習型授業では、学生の主体性を尊重する姿勢を基本とし、ある程度の枠を設定しつつも、学生の興味関心に基づく自発的な行動や、自分にも取り組めるという認識を尊重した。

#### ○作成した教科書・教材

学生配布資料および課題資料作成、講義 15 回分の PPT の作成。

#### ○自己評価

本授業においては、目標としていた教育目標は概ね達成できたと考えられる。自己評価のための指標として、以下の 3 点を主に用いた。

- ・ ミニテストによる理解度の把握
- ・ コメントペーパーから読み取れる学生の意欲の変化
- ・ 授業評価アンケートの結果

学生の提出するレポートについては、その日の学びを踏まえたうえで、自分なりの考察がなされているか、また既知の知識と新たな学びを関連づけて論じられているかという点を重視し、学生自身が「当事者意識」を持って取り組んでいたかどうかを評価基準とした。

演習課題では、学生の個人の成長については「状況判断力・考察力・企画力」の 3 点を軸とし、チーム活動においては「自身に求められる役割の把握・責任感・実行力・全体を俯瞰する力」の 4 点を軸に支援と評価を行った。授業評価アンケートにおいても概ね良好な結果が得られており、学習者の理解と成長を一定程度促すことができたかと判断している。

## II 研究活動

#### ○研究課題

日本の女性のキャリア形成に関する調査

- (1)組織サポートと女性の就業継続の関係 (仮)
- (2)女性の就業に関わる役割分担意識の国際比較 (仮)

#### ○目標・計画

##### 【目標】

- (1)について年度内の学会発表および論文化を目指す。
- (2)については国際学会発表による諸外国研究者との情報交換を目指したい。

##### 【計画】

(1) 本研究では、組織サポートを「部署レベル」と「事業所レベル」の 2 つの視点から捉え、特に育児・介護期を意識した就業継続への影響を検討する。「部署レベル」のサポートは、主に上司や同僚からの尊重姿勢等を、「事業所レベル」では公正な人事評価など組織としての制度や風土を示す。調査は正規職の男女を対象とし、妥当性と信頼性の確認後、共分散構造分析にて関連する複数の因子と共に影響を確認した。

(2) どの様な上司サポートが、仕事満足および就業継続に繋がるのか検討する。仕事そのものへの満足に加え、家族ケアを意識した就業継続意思への影響を男女別に検討する。具体的には、上司のサポートを「情緒的サポート」「道具的サポート」「心理的安全性」の 3 つの視点から捉え、「仕事満足度」および「育児・介護時の就業継続意思」への影響を男女別に分析した。

#### ○2017 年 4 月から 2025 年 3 月の研究業績 (特許等を含む)

##### (学術論文)

- ・ 吉村美路・松隈美紀・手嶋康則 (2018), 「第 4 回福岡マラソン 2017 におけるアクティブ・ラーニングの効果 -モチベーションと自主行動を考える-」, 平成 31 年度中村学園大学・短期大学研究紀要, 51 号, 2018 年 3 月.

##### (学会発表)

- ・ \*Michi Yoshimura<sup>1</sup>& Hiroyuki Yamaguchi<sup>2</sup> (2024) " How Does the Manner of Supervisor's Support

Affect the Employment of Men and Women” 11th International Conference on Education and Psychological Sciences (ICEPS 2024) @JW Marriott Phuket Resort & Spa in Phuket, Thailand, Online, Oral Presentation, May 10-12, 2024.

- \*Michi Yoshimura<sup>1</sup> & Hiroyuki Yamaguchi<sup>2</sup> (2024) ” What Kind of Organizational Support is Appropriate for Work Retention during Life Events—From Men/Women Comparison in Japan —, Twenty-fourth International Conference on Diversity in Organizations, Communities & Nations. @Lusiada University, Lisbon, Portugal, Online, Poster Presentation, July.3-5, 2024.
- 吉村美路 (2023) 「女性の両立葛藤と性格特性の関係について」, 日本コミュニケーション学会九州支部学会発表, ハイブリッド開催 (オンライン口頭発表), 2023年11月.
- 吉村美路 (2022), 「妻のキャリア形成納得感は夫婦間コミュニケーションにどのように影響するのか?」, 日本コミュニケーション学会九州支部学会発表, オンライン開催 (口頭発表), 2022年12月.
- 吉村美路 (2022), 「性別役割認識におけるジェンダーギャップはどこまで変化したのか?—女性の就業への影響の視点から—」, 九州大学研究助成金採択者成果発表 2021, オンライン開催 (口頭発表), 2022年2月.
- 吉村美路 (2021), 「理想の女性像が就業継続に与える影響について」, 日本コミュニケーション学会九州支部学会発表, オンライン開催 (口頭発表), 2021年3月.
- 吉村美路 (2021), 「日本女性の労働意欲に関する調査」, 九州大学研究助成金採択者成果発表 2020, オンライン開催 (口頭発表), 2021年2月.
- 吉村美路 (2021), 「価値観が女性のキャリア継続意欲に与える影響について」, 2021年度日本ビジネス実務学会全国大会, 北九州市立大学, オンライン開催 (口頭発表), 2021年6月.
- 川越愛里・吉村美路 (2020), 「名古屋の農業の持続可能性について—実践に学ぶ体験型学習—」, 2019年度九州共立大学×愛知東邦大学「地域を考える研究会」, 九州共立大学, 対面 (口頭発表).
- 中村千聖・高垣怜佳・加藤亮太・吉村美路 (2020), 「地域との相互理解を目指した実践的取り組みの報告—地域保育園における協働制作を通じたコミュニケーション活動—」, 2019年度日本ビジネス実務学会中部ブロック研究会, 金沢星稜大学, 対面 (口頭発表), 2020年1月.
- 吉村美路 (2019), 「日本の女性におけるワーク・ライフ状況の俯瞰的考察」 2019年度日本コミュニケーション学会九州支部大会, 福岡女学院大学, 対面 (口頭発表), 2019年11月,
- 吉村美路 (2018), 「プロジェクトチームにおけるモチベーションの推移—リラクセス値との相関関係について—」, 2018年度第34回産業・組織心理学会全国大会, 名古屋大学, 対面 (ポスター発表), 2018年9月.
- 吉村美路 (2018), 「大学生における対人関係重要度に関する意識調査」, 2018年度第60回日本教育心理学会, 慶應義塾大学, 対面 (口頭発表), 2018年9月
- 吉村美路 (2017), 「ストレス状態における食嗜好性の差異について *The difference of food preference of stress condition*」, 2017年度第24回日本行動医学会学術総会, 聖路加国際大学, 対面 (ポスター発表), 2017年12月.

(特許)

特記事項無し

(その他)

- 吉村美路 (2024) 「仕事、結婚、幸せ —— 社会心理学から女性のキャリアを考える」 インタビュー記事, So-gúd (ソウグウ): 株式会社エクシード, 2024年6月掲載.

- ・吉村美路 (2024), 日本コミュニケーション学会 九州支部ニューズレターNo42・43 合併号, 「日本・トルコ友好の土地へエルトゥールル号遭難事件」 P10-11, 【書評】 虎岩朋加 (著) 『教室から編み出すフェミニズム: フェミニスト・ペゴタジーの挑戦』 P18-19, 2024 年 8 月刊行.
- ・吉村美路 (2024), 「異文化コミュニケーションを学ぶことは人間性を高めることにもつながっていく」 インタビュー記事, クリックアンドペイ合同会社, 2024 年 10 月 8 日掲載.
- ・吉村美路 (2022) 「性別役割認識におけるジェンダーギャップはどこまで変化したのか? - 女性の就業への影響の視点から -」, 発行物「ポリモルフィア」8 号, 九州大学男女共同参画推進室, 2022 年 6 月刊行.
- ・吉村美路 (2021), 「コロナ禍で見えたもの」, 日本コミュニケーション学会 九州支部 ニューズレター No. 37, P10-11, 2021 年 7 月刊行.
- ・吉村美路 (2021), 「出産・育児を機会とした日本女性の労働意欲に関する調査」, 発行物「ポリモルフィア」7 号,九州大学男女共同参画推進室,2021 年 6 月刊行.
- ・吉村美路 (2021), 「日本女性の労働意欲に関する調査」, 令和 2 年度九州大学研究成果報告書, P69-P78, 2021 年 3 月.
- ・吉村美路 (2018), 日本コミュニケーション学会 九州支部ニューズレターNo31.P9-10, 2018 年 7 月.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

特記事項無し

○所属学会

日本心理学会、日本コミュニケーション学会、産業・組織心理学会、日本社会心理学会、日本教育心理学会

○自己評価

2024 年度においては、国際学会での発表および執筆活動を通じ、継続的な研究発信と学術的貢献を行うことができた。特に、国際学会での発表では、性別による上司からの支援の受け止め方や、ライフイベント期における職場支援の在り方について、日本における調査データに基づく実証的な知見を提示した。これらの発表は、国際的な視点から意見交換を行う貴重な機会となり、今後の研究の方向性や国際比較への視野を広げるきっかけともなった。

また、日本コミュニケーション学会 九州支部ニューズレターでは、地域と歴史に根ざした文化的テーマについてのエッセイと、現代フェミニズム教育に関する書評を執筆した。研究者としての立場だけでなく、教育・実践への関心も踏まえた多角的な表現活動を行うことができた点は、今後の教育実践や学術普及活動において重要な経験であったと考えている。

以上の業績を通じて、専門分野における理論と実践の橋渡しを意識した発信が一定の形で達成できたと自己評価する。今後は国際学会参加や学術誌への投稿をさらに強化し、より一層学際的な連携を深めていきたい。

III 大学運営

○目標・計画

【目標】

全学委員会ではキャリア支援センター運営委員会および IR 推進委員会にて、その職務を果たし、大学運営に貢献した。

【計画】

#### ■キャリア支援センター運営委員

定例会議加え、2024年度は主に以下の項目について活動する。

- ・愛知県に特化した就活イベントに主催側としても携わり、地元企業とのネットワークづくりに努める。
- ・就職活動イベントに積極的に関わり、就職率向上および学生にマッチした就業先情報を収集、共有していく。
- ・地元中小企業の現状把握および情報共有に努める。

#### ■IR推進委員会

- ・今年度新たに新設された委員会であるが、組織により影響のある取り組みを行なえるよう努めたい。

#### ○学内委員等

- ・キャリア支援センター運営委員
- ・IR推進委員会

#### ○自己評価

- ・キャリア支援センター運営委員

本年度は当初立てていた委員会活動の計画に基づき、積極的な情報発信やイベントへの関与を目指していたが、想定より多忙な業務が重なり、十分な時間を確保できず、各種イベントへの参加や支援に十分に関与できなかつた点は心残りである。

一方で、近年の就職市場は売り手市場の傾向が続いており、単に「就職する」ことに留まらず、「より希望に合った職場に就職する」ことを重視する学生が増加している。こうした状況を踏まえると、学生一人ひとりの希望や価値観に寄り添いながら、就職市場の動向に即した柔軟かつ実践的なサポートを継続していく必要性を改めて感じている。学生の多様な進路選択を支援できるよう、就職支援体制のさらなる充実を図っていきたい。

- ・IR推進委員会

本年度は、IR推進委員会が新設された初年度ということもあり、他大学との積極的な情報交換を通じて、IR活動に関する幅広い知見を得ることができた点は大きな成果であった。委員メンバー間でも、IRに関する知識やこれまでの取り組み、目標等を共有する機会が多く、委員会としての足並みをそろえる上で有意義な年度となった。特に、他大学の具体的なIR事例に触れることで、自大学の現状を客観的に見直す視点を得ることができたこと、また、外部有識者の意見を通じて本学における改善の方向性を見出せたことは、本委員会として非常に大きな収穫であった。

今後の課題としては、IRの成果をより実践的に活用していく体制づくりが求められる。特に、学生の学びや成長を可視化し支援する手段としてのポートフォリオの活用について、より具体的な運用方針・活用方法を計画し、全学的に定着させていくことが必要であると感じている。

## IV 社会貢献

### ○目標・計画

#### 【目標】

教員として優れた人材の育成に努めるとともに、研究者として研究成果を社会に還元する。

#### 【計画】

地元中小企業との連携に尽力し、産学連携活動を通じて知識を実践でいかす経験を実施する。社会でいきる知識の習得を目指し、教育方法の開発と研究成果を学会・研究会等を通じ発表していく。

## ○学会活動等

日本コミュニケーション学会九州支部事務局長

2024年度も運営委員の一員として、九州支部大会；ハイブリッド形式@鹿児島大学（11/30）の運営に尽力した（対面参加）。

## ○地域連携・社会貢献等

- ・ 学生 EXPO MIRAHAKU 名古屋祭り（ゼミ 1 年および 3 年合計 27 名）

久屋大通公園「光の広場」にて開催されたイベントにブース出展し、能登半島地震のチャリティ募金活動を行なった。本イベントは、学生が主体となり、市民との交流を通じて名古屋の未来を活気づけることを目的としたイベントである。ブースでは、能登の米をチャリティー菓子などを販売し、売上金は日本赤十字社を通じて全額寄付をする取り組みをおこなった。2024年5月18日（土）-19日（日）

- ・ 愛知牧場における酪農体験(ゼミ 3 年生 13 名)

愛知県の生乳生産量は全国 8 位であるあまりが、知名度は低い。知られていない地元の強みと、身近に牧場があることが県民にもたらす教育効果について学んだ（成果は“地域と連携した授業・活動報告会；愛知東邦大学 2024.2.8 に発表）、愛知牧場， 2023 年 12 月。

## ○自己評価

基本方針のもと、教育・研究・社会貢献の各側面において複数の取り組みを実施した。教育面では、地元中小企業や地域社会と連携した実践的な学びの機会を通じて、学生に社会で生きる知識や主体性を育むことを意識した。具体的には、「学生 EXPO MIRAHAKU 名古屋祭り」への参加を通じて、ゼミ学生が企画から運営、チャリティ販売活動までを自ら考え行動する機会を得たことは、学生にとって貴重な経験となった。能登半島地震支援という社会的意義のあるテーマを通して、社会貢献と市民との対話を体感できた点も意義深い体験であった。

また、愛知牧場における酪農体験を通じて、地域の資源や産業の価値を再発見し、地域と連携した教育のあり方について学生と共に考える機会を持てたことは、教員としての成長にもつながった。この成果は学内の報告会でも共有し、教育活動としての意義を再確認した。

研究活動としては、日本コミュニケーション学会九州支部事務局長としての役割も担いながら、研究成果の社会実装を意識した活動に取り組んだ。今後は、こうした実践型の教育を支える教育方法の開発と評価にも取り組み、学会や研究会を通じて発信していきたい。

総じて、学生の学びと地域社会とのつながりを意識した取り組みを通して、目標に掲げた「知の社会還元」の一端を実現できたと考える。今後は、こうした取り組みを継続しつつ、ポートフォリオの活用など学生の成長を可視化する仕組みづくりにも力を入れていきたい。

## V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

- ・ 九州大学大学院博士課程に在籍し、研究活動に研鑽していく。
- ・ 自由民主党女性局「女性未来塾」にて、日本女性の現状について情報の共有、更新に努める。
- ・ 心理学分野の研究者らの「読書会」にて研究文献の共有、知識の更新に努める。

## VI 総括

2024 年度は、学生の主体的な学びと社会とのつながりを意識した授業づくりを実践した。講義ではアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れ、知識と現実社会との接点を意識しながら、自ら考え行動する力を育むことを重視した。演習では、学生の興味関心に基づく自発的な取り組みを尊重し、一定の枠組みの中で自律的に思考し、協働できるよう支援した。地域に根ざした体験型の学

びも取り入れ、身近な社会資源や課題に目を向けながら学びを深める姿勢を育てることができた。公共性や社会貢献を意識した実践に取り組み、学生にとって社会と関わる貴重な機会となった。

研究面では、性別やライフイベント期における職場支援に関する調査結果を国際学会で発表し、他国の研究者との意見交換を通じて視野を広げる機会となった。また、外部メディアでのインタビューを通じて、異文化理解やジェンダーに関する知見を社会に向けて発信する機会も得た。

委員会活動では、学生支援体制の見直しや情報収集に取り組む中で、社会状況や学生の意識の変化を踏まえた柔軟な支援の必要性を再認識した。また、学内外の事例や意見をもとに、教育の可視化や改善に向けた取り組みの方向性を整理することができた。

全体として、教育・研究・社会貢献の各領域において、知の社会還元を意識した取り組みを進めることができたと自己評価している。今後も、実践と理論を往還しながら、学生の成長を支える教育と研究を展開していきたい。

以 上